




星間戦争
～鳥VS犬～



あいね

目次

星間戦争 ～鳥VS犬～	1
-------------------	---

星間戦争 ～鳥VS犬～

第一章 謎の宇宙人！？

リリリリ、リリリリ。

ああああ、うっせえな！！

バン！！

俺、井上和也は乱暴に目覚ましをぶっ叩き、脳を覚醒させていく。

とぼっちりを受けた目覚ましは6：30を指していた。

しかし、俺は、もう少し、ベッドで休むことにした。

余裕を持って、この時間に設定しているのだ。

「mp3でも、聴いていよう……。」

俺は声優の安藤寧々の声に悶えながら、
一人幸せな朝を味わっていた。

そう……その時までは……。

「た——すけてええええええええええ！！！！！！！！！！」

ガッシャァァァン！！！！！！！！！！

「ああ！？ 何事だ、一体！？」

俺の部屋の窓ガラスは粉々に吹き飛び、床に破片が飛び散る。

「あいたたた。ここはどこですか??」

見ると、そこには美少女がいた。

プラチナブロンドの長髪。すらっとした肢体。気品漂うオーラ。
お嬢様のような優雅な美少女だった。美少女って実在したんだ.....。

「.....ここは日本。そして、静岡。三島。
そして、俺の部屋だああああ!!!!!!」

「まあ!!　なんと!!　ここが部屋!?
ガラスの破片が散らばってるではありませんの!?
掃除はいたしませんの!?」

「今、てめえが割ったんだよ!!　鳥頭かよ!!」

.....この一見美少女をよく観察してみる。

白いドレス。ティアラ。どこかの姫のようにも感じる。

あれだけ、ツッコんできたのに、傷一つない。

一体どうなっているのか??

「ああ、それはいぬぬん様のおかげですよ、ちゅぴぬん。」

「はい!???　いぬぬん様のおかげ!?????」

「そうです!!　私の崇敬するいぬぬん様のご加護があり、
わたくしチュピザイアはこうして生きているのです!!
申し遅れました、私は惑星チュピータ統一王国の第一王女のチュピザイアです。
チュピ子と呼んでください。
すべてはいぬぬん様のおかげなのです!!!!!!」

惑星チュピータ!?　第一王女!?　いぬぬん様!?
.....何がなんだかよくわからない。

「.....俺の名前は井上和也、普通の高校生で、
至らないクリスチャンだ。これでもクリスチャンなのだ.....。

これでも随分と性格は矯正された方だが.....。」

「ちゅぴ？ よくわからないちゅぴぬん。
いぬぬん様、教えてください.....。」

「それより、これの掃除だな。下行って塵取り取ってくらあ」

「ちゅぴ！？ いぬぬん様、我に力を.....。」

チュピ子はマジカルステッキを取り出し、祈りを込め、窓ガラスに向けて、
光りを放った！！

チュピヌウウウン！！！！！！！！

窓ガラスは元に戻った。

効果音は非常に気分が悪かった。

「どうです！！ これがいぬぬん様の力ですよ！！
宇宙を総べるいぬぬん様にかかれば、こんな庶民の薄い窓ガラスくらい、あっという
間.....って、
うっ.....いぬぬん様.....我に力を.....。」

チュピ子はうずくまり、だるそうにしていた。
まあ、窓ガラスが治っただけ、ましたが。

「いったい何でこんなことに.....。」

「はい。カラザーク星へ訪問した際、帰り際宇宙遊泳をしまして.....
そして、ブラックホールにいつの間にか飲み込まれ.....そして.....
今現在に.....うっ.....これぐらい平気です.....。」

チュピ子はよろよると立ち上がった。

「まあ、こんなことは何でもありませんよ！！
人間、元気が一番！！」

「.....お前、今まで、倒れてただろ！？」

「ちゅぴ！！！！？ そんなまさか.....。」

チュピ子は倒れたりなんかしていませんよ、ちゅぴぬん。」

「そのいぬぬんとやらの体力を吸い取られてるんじゃないか！？
そんな力使って、これから先大丈夫なのか？？」

「いぬぬん様は悪くありません！！
わたくしたちの願いを叶えてくれる最高のパートナーなのです！！」

「……まあ、そういうなら、別にいいけどよ……」

「……ああ、だるい、だるい、いぬぬん様、いぬぬん様、
早くまたお会いしとうございます。」

「相当、好きなんだな。」

「はい。キスがうまくて、もう、くらくらになってしまうのですよ！！！」

「キスがうまい！？ もういい。俺は飯食って、学校に行くからな！！」

「ここに犬サプリアがありますが！？ おいしいですよううう。」

「いらん。偶像に捧げられた物は食わん！！」

「てい！！」

チュピ子はそのサプリアとやらを乱暴に俺の口に入れてきやがった！！

無駄に力があるな、こいつ……。

「んっ！！ はっ！！ かはっ！！」

瞬間。すさまじいエクスタシーが俺の脳天から足先まで駆け巡った！！
とろけるような快楽。くはっ！！

そして……。

すさまじいだるさが体を襲う。

これは、学校に行けんぞ……。

「ううううん。これはだるい。学校は休みだな。あとで連絡しよう……。」

「チュピピ。いぬぬん様を悪く言った報いなのだ！！
存分に味わうがいい！！」

俺はベッドに横になった。

チュピ子がまじまじと俺の股間を見ている。

「てめえ！！ 何見てんだよ！！」

「いや、あなた男でしょ！？
わたくしたちの星では男は数千年前に野蛮ということで、撲滅しました。
なので……ちょっと気になって……。」

「そうかよ……」

「ちょっとだけ、ねっ？ ちょっとだけ見せてくださいませんか??」

「だめだ！！ 見せてやらん！！
コーヒー持ってきてやるからな！！ ちょっと待ってろ！！」

「男らしい！！ これが男らしさ！！ パンツの下が気になる……」

「ダメです！！ 見せません！！ いけません！！」

俺は下に行きコーヒーを作りに行った。

俺の両親はこの家にいない。

仕事で忙しい。仕方がない。

俺はコーヒーを作り、2階の自室へ上がった。

……

……………

……………

「って！！ お前何やってんだよ！！」

「これが男の人の趣味……。ベッドの下にエロ漫画……。
このティッシュはなんですか??」

「あああああああ、それは見なくていい！！ 触らんでよろしい！！」

「匂いは……」

「嗅ぐなああああ！！！！！！！！」

「まったく、これだから男は……。」

俺はコーヒーをちゃぶ台に置いた。

「ほらよ。コーヒーだ。飲んでいいぞ。」

「お粗末様です。」

「何でそんな言葉知ってるんだよ！！ 使いどころ違うし……」

「ちっ……」

「いいから飲めよ。クレープたくさん入れて甘々にしたぞ！！」

「はあ、では、いただきます！！」

ごくっ……。

チュピ子がコーヒーを一口飲んだ。

そして……。

「これは……おいしい……高かったでしょうに……」

「いや、これは15円もかかってないと思うぞ。」

「!?? ……チュピータ星にもこれほどの飲み物はない……。
……………」

「？」

「っ！！？ いやっ？ 何でもない。この星には興味はない。
あなたにも興味なんてありませんからね！！」

「ツンデレかよ！！」

「で、でれてなんていませんよ。ちょっと……おいしかっただけです。」

「そうかよ。」

「……………」

お互い沈黙が続く……。

チュピ子が口を開いた。

「あ、あなたの趣味はなんですか??」

「ああ？ アニメとゲームとトレカだが??」

「トレカ??」

「ああ。ピークロスが今熱いんだ！！」

「ピークロス……。」

それからチュピ子と数時間ほど話した。

チュピ子は終始笑顔で、楽しげだった。

和也も女子と話すのは余りないので白熱した。

(和也……………)

チュピ子の中にある感情が芽生え始めているが、本人でもよくわからないでいた。

……

……………

.....

第2章 チュピータ星へGO！！

それから、しばらく話していると。

ガシャアアアン！！！！！！！！

また、窓ガラスが割れた。

小型宇宙船が飛び込んできた。

「一体、今度は何なんだよ、2回も窓が割れやがった、どうしてくれんだよ！！」

「チュピ子！！ 探しましたよ。150年間も！！」

「150年間！？」

金髪の若い女性が宇宙船から出て来た。

チュピ子が叫ぶ。

「お母さん！！」

「これもそれも、いぬぬん様のおかげ。さっ、城に帰りましょう。

いぬぬん様もきっとチュピ子のことを待っておられるわ」

「はい！！！！」

チュピ子と母は抱擁しあった。

チュピ母が切り出す。

「それはそうと、あなた、よく今まで、チュピ子を保護してくれました。

チュピータ星に案内しましょう。さっ、どうぞ」

「えっ？　ちょっ、いやですって！！　俺にだって生活が！！」

「是非お礼がしたいわ。惑星チュピータに案内します。
とってもいいところなんだから♪」

「何で、そんなに握力が強いの！？　放せええええええ！！！！」

俺は小型宇宙船に乗り込まされた。

.....

.....

.....

宇宙船の中はとても広かった。

無駄に広かった。

ソファがあって、ベッドがあって、テレビがあって、
操縦席があった。

3人乗っても十分だった。

チュピー子の母は操縦席に座り、何か操作している。

チュピー子はソファに座り、シートベルトを着用した。

俺も座り、教えてもらい、シートベルトを着用した。

チュピー子の母は言った。

「チュピータ星はここから4億5000万光年離れてます。
およそ、1時間かかるから、気を付けてくださいね」

「1時間.....」

意外と長かった。

「体にお気をつけて」

「あん？」

そして宇宙船は動いたらしい。

「これが！ いぬぬん様の力なのよ！！

すべてを見通しておられるいぬぬん様の恩恵は計りしれないものがあるのよ！！
いぬぬん様はお優しく、すべてのものに恵みを賜るのよ。うっ……うげ……」

宇宙船は空を飛んでいるらしい。ものすごい重力がかかる。

それにしても……

「気持ち悪い……なんだ……これは……吐き気が……」

「それはいつも思うんだけど……何でだろ？ 船酔い??」

「いや、そのいぬぬんとやらのせいだろ。絶対悪いやつだ！！」

「チュピ！！ いぬぬん様の悪口を言ってはいけません！！
天罰が下りますよ、ああ、恐ろしい。」

「それにお腹が苦しいし……トイレはあるのか!？」

「あるちゅぴ。行くのは重力で大変だけど、行けるチュピよ。」

「うっ……吐き気も……すまん、ちょっとトイレ行ってくる。」

「後ろ右にあるチュピ。うっ……ちょっとの我慢、ちょっとの我慢。」

俺はトイレに急いで行った。

「うっげえええええ、えろえろえろえろ」

うげええええ、盛大に吐いちゃった。それにもうトイレも我慢限界！！

「ノロウイルスかよ、これ、最悪」

俺は最低な宇宙旅行を楽しんだのだった。

.....

.....

.....

「えろえろえろえろ」

チュピ子の母が到着後、船のトイレで吐しゃ物を吐いていた。

そして、出てきて、開口一番。

「ふう、はあはあ、吐いたあとは気分がいいですね。」

「私も吐いて元気を回復しました。いぬぬん様って素晴らしい！！」

「お前ら体調悪いだろ。俺だってだるいし、くらくらするぞ！！」

「！！ 何でそれを！！ チュピータ星人は慢性的な体調不良を抱えていて、あの、いぬぬん様ですら、治してくださらない。一体どうなっているのか。」

「だから！ いぬぬんに頼るからいけないんだよ！！
ちゃんと神様に依り頼まなくちゃだめだぞ」

「ちゅぴ！？ それは何ぬん？？ 知らないやん。」

「神様をご存知ではない！？ ほら、このハンディバイブルに.....」

「わー！ わー！！ 知らない！ 見ない！！ 聞こえない！！」

.....こいつら.....。

「いぬぬん様からの愛から、わたしたちを引きはがす物はないのです！！
さっ、着きましたよ♪」

ここは.....。

壮大なビル。人人人。樹木。そして、犬の大きな偶像。

町の中心に高層ビルのような大きな犬の偶像があり、

道の両端にも鎮座していた。

「……………最低な町だな。」

俺は素直に感想を述べた。

その時――

「あっ、これはこれはチュピ子！！ 久しぶりぬんぬんね～～。」

「あっ！！ ああっ！！ いぬぬん様！！ 会いたかったですよう～～」

その時、俺は天使を見た――気がする。

白銀の長髪。バイオレットの瞳。平均よりちょい上な感じの身長。
すらっとした肢体に、バスト。輝かしいオーラまぶしい美少女であった。

これがいぬぬん……。かわいいなあ……。

「ぬん？？ ぬんぬん！！？？ あ、あなたは！！」

「？」

「お、御名前は……??」

「? 井上和也だけど……??」

「和也様！！ お会いしたかったですよううう」

「何!？」

「昨日、夢のお告げで将来の旦那様が今日来るとあって、ウキウキしてまして。
多分、あなた……だと……思います……」

「ずいぶんいい加減だな」

「何か証拠を、証拠はありませんか!？」

「証拠? う～～ん。」

俺は聖書を開き、互いに愛し合うならば、
それによってあなたがたが私の弟子であることを
皆が知るようになる。ヨハネ13：35節を引いて、読んで見せた。

いぬぬんは大喜びした。

「いっぬ～～～～。互いに愛し合うなら、ですか。
その言葉は何ぬん？」

「聖書だよ。神様の言葉がのってるんだよ。」

「神様の言葉！？　ほう、ちょっと信じがたいぬん……………」

「いぬぬん様、神様って何チュピ！？」

「知らなくていいぬん。いぬぬんに祈れば叶えてあげるぬん。」

「はい！　わかったチュピ。」

「だから！　騙されてるって！　そのいぬぬんに！！」

「そんなこと、ないぬん～～。そんなことしないぬん～～。」

「そうですよ！！
いぬぬん様に限ってそんなことするわけないでしょう！！」

「何で、俺が怒られなくちゃなんねえんだよ……………」

「和也さんもいぬぬんに頼っていいぬんよ。
いくらでも願いを叶えてあげるぬんぬんよ??」

「いいから！　頼まねえから！！」

「和也様、大好きぬんぬん」

「うっせえ！！　離れろ！！」

しゅん…………。

あっ…………しよげちゃった。ちっ…………しょうがねえな…………。

「ほらよ、ミントスガムやんよ。これ食って元気出せ！！」

「！！ いぬぬんにご褒美！！ 和也様あ、うれしいですよううう。」

「こらっ！ 口をなめようとするな！！ それはだめだ！！」

「ぬん！ ぬんぬん！！ ぬんぬん！！」

「いぬぬん様あ、チュピ子にもご褒美を……。
いぬぬん様に骨太郎を差し上げますので……………」

「……………まあ、いいでしょう。さっ、近づくのです……」

「はい、いぬぬん様。」

「繰り返しなさい。私はいぬぬん様に一生の」

「私はいぬぬん様に一生の」

「忠誠と献身をささげます。」

「忠誠と献身をささげます。」

その後……

いぬぬんの唇とチュピ子の唇が重なった。

いぬぬんは舌を入れたらしい。

チュピ子は頬を紅潮させながら、一生懸命いぬぬんとキスをしている。

そして……

いぬぬんはチュピ子の頭を抱え、多分だけど……

唾液を入れた。

チュピ子の体がビクンビクンと跳ね、震えている。

そして、キスは終了した……。

「ふう。どう、よかったぬん？」

「い、いぬぬん様、続きを！！」

「ダメぬん。続きは和也様とするぬん。残念ぬんぬんね~~~~。」

「キッ！！」

チュピ子が睨んでくる。そうすごまれてもいぬぬんに好かれるのは困る。

「和也様ぁ、ボール投げて欲しいぬん。とってくるぬんぬんよ~~。」

いぬぬんがボールを差し出す。

こいつは犬のようだ。

しょうがない。

「それっ！ いぬぬん！ 走れ！！」

「ぬん！！」

いぬぬんは走ってボールを取りに行った。

チュピ子は言う。

「何で、あんたはいぬぬん様より偉そうなのよ。

いぬぬん様は第17代犬羅神様なんですよ！？」

「俺はいぬぬんを上に見ていない。ただの変った変な奴と見ている。」

「まったく、いぬぬん様はこいつのどこがいいんだか。」

「とってきたぬん！ 偉いぬん??」

「ああ、偉いぞ。いぬぬんお座り！！」

「ぬん！！」

いぬぬんが座った。実に賢い。

「よしっ！ いぬぬん！！」

「いっぬ~~~~~!!!!!!!
和也様ぁ.....すっきいいい!!!!!!!」

いぬぬんが嬉しそうにしている。

こいつ.....。

顔はかわいいし、なつくし、結構かわいいな。

と、思ってしまった。

道行く人がいぬぬんに気づいたらしい。

ひれ伏して挨拶した。

「いぬぬん様！！ こんにちは！！」

「ぬんぬん♪ もっと祈るといいぬんぬんよ～～。」

いぬぬんは人気者だった。

.....

.....

.....

宮殿に帰り、祝宴のあと、

生ごみの処理となった。

「さてと、生ごみはカラザーク星に送ってと.....。」

「カラザーク星？」

「この星の衛星で鳥たちの星チュピ。鳥たちの食糧になるチュピ。」

「鳥たちの星……食料……」

「そう！ 鳥たちは農作業をさぼるから、わたくしたちが助けてるチュピ。
第一次星間戦争のあとは盟約もできて、仲良く暮らしてるチュピ。」

「盟約……鳥と……。」

「犬鳥10か条

第一条 犬と鳥の存在価値は平等である。

第二条 相互は戦争をやめる。

第三条 犬と鳥そして真人間は仲良く生活する。

第四条 カラザーク星はゴミの廃棄場になることを黙認する。

第五条 チュピータ星はカラザーク星に技術援助をする。

第六条 相互は協力して他の星の軍事勢力に立ち向かう。

第七条 相互の経済危機は相互で支え合う。

第八条 上記を満たしていない場合、戦争を辞さない。

第九条 四年に一回は星間ピックを開く。

第十条 仲良くしよう。

と、あるチュピ。カラザーク星ではわたくしたちの生ごみが唯一の食料チュピ」

「生ごみが食料……」

「仕方ないぬん。鳥はバカぬん。仕方ないぬん。」

「さいですか」

ピンポーン。

「チュピ？ 王宮にチャイムだなんていったい誰が？
って、からちゅん！ 入っていいチュピよ～～。」

からちゅん？ すずめ？

ガラッ。

登場したのは漆黒の翼をまとった黒い長髪の美少女であった。
目は真紅に輝いていた。

「からちゅんさんってのは例のカラザーク星の頭目ですよ。
つまりボスです。」

「へー」

「え、えっと、い、いぬぬん……今日の昼、チュピ子とキスしてるの見て、
軽く焼いちゃった。だ、だから、その……チョコ……作って来たんだ。
よかったらでいいから、た、食べてくれないかな？」

からちゅんは赤面しながらチョコを差し出して来た。

いぬぬんが反応した。

「ありがとぬん。おいしそうなチョコぬんね～～。食べていいぬん??」

「食べてください!!　お願いします!!」

いぬぬんはチョコを口の中に放りこんだ。

「う～～～～ん、おいしいぬん!!　どうやって作ったぬん!？」

「チョコを溶かして、生クリームを入れて、ブランデーを軽く入れたんだよ。
それを固めてココアでコーティングしたんだよ!!　塩も少し入ってるんだ。
おいしく食べてもらいたくて一生懸命作ったんだよ!!」

「うれしいぬん。ご褒美欲しいぬん??」

「え、ご、ご褒美!?　ボクに!?　え、ええええ、いいのかなあ、そんなこと。
え、え、何してくれるの!？」

いぬぬんはからちゅんの近くによって額にキスをした。

「ひゃあああああああああ」

からちゅんが声をあげた。起きていることが信じられないようだ。

そして、いぬぬんはからちゅんの頭を抱き、熱い口づけをした。

「んっ——んっっ——」

からちゅんの顔はまっ赤になり、体はびくびく痙攣している。

そして――

「んんっ――」

いぬぬんはまた唾液をいれたらしい。

からちゅんはいぬぬんに抱き付いた。

しかし、いぬぬんが振り払う。

「気持ちよかったぬん??」

「いぬぬん――続きは――??」

「いつかしてあげるぬん。」

「ほんと!? 絶対だからね! 約束だからね!!」

「タアソダケドネ」

聞こえない声が俺には聞こえた。

ジト――――――。

チュピ子がうらやましそうに見つめていた。

からちゅんは帰っていった。

.....

.....

.....

「カラザーク星に生ごみを送信っと。無事に着くことを祈って今日は寝るチュピよ。

いぬぬん様、一緒に.....」

「ダメぬん。いぬぬんは和也様のところで寝るぬん。」

愛の結晶を作るぬん。温かい家庭を作るぬん。

バイバイぬんぬんね～～。」

「そんな……いぬぬん様……わたくしのことはどうでもいいんですか??」

「しょうがないぬんね。こっちに来るぬん。」

「はい!!」

「目を閉じて……」

「はい……」

チュピ子が待っている。そこへ……。

ちゅっ♪

唇が重なった。いぬぬんはチュピ子の顔を持ち、
熱烈に口づけした。

そして……。

チュピ子のうなじを吸引し、キスマークを作った。

「さっ。これで寝られるぬん。おやすみぬん」

「いぬぬん様………続きをいつか……」

いぬぬんはこっちを振り返り、

「さっ。和也様、寝室へ!!」

「一緒に寝ないからな!!」

「な、何でぬん!? こんなにかわいい女子と一緒に寝るって言うのに、
何で断るぬん。おかしいぬん!!」

「お前みたいな不謹慎な奴とは寝ない。」

「そんな……ひどい……温かい家庭が作りたいたけなのに……」

「……まあ、ダメだ。おやすみね」

「そんな~~~~~」

俺はあてがわれた寝室へ入った。

………

………

………

朝起きると、いぬぬんが気持ちよさそうに俺の腕をつかみながら、よだれをたらして寝ていた。

こいつ……………。

しかし、外が騒がしい。

窓を開けてみると――

大惨事が広がっていた。

第3章 第2次星間戦争

ガラッ――

チュピ子がいって来た。

「た、大変です、烏たちがチュピータ星に宣戦を布告しました。
今、チュピータ星のここ首都、チュピズムを攻撃中です。
どうします？ いぬぬん様??」

「原因は何ぬん？」

「どうやら、生ごみ転送装置に誤差があったようで、
烏たちは朝飯が食えなかったとのことですよ。」

「たったそれだけで……………」

「それから、チャンとした飯を食わせろとのことで鬱憤がたまっていたらしいです。」

「そうぬんか……………総員出動して、烏たちを迎え撃て！！」

「イエッサー！！ 出撃です！！」

……………

……………

……………

町に出ると、黒髪の烏たちが一般市民を襲っていた。

金目のものをひったくっているらしい。

ほっとくわけにいかない。

俺は心の中で祈った。(どうか、この暴動が収まって俺は家に帰れますように！！)

「いぬぬん☆キューティーチェンジ！！」

いぬぬんは叫ぶとともに魔法少女のような服装になり、両手剣を構えていた。

「これはいぬぬん・クレイモア。烏たちを蹴散らしてくる！！」

いぬぬんは飛び、町を襲う烏に斬りかかった。

「クエーッ！！」

断末魔のあとに烏たちが次々と気絶していく。

「はっ！ てやっ！ そいっ！！」

いぬぬんの動きは早い。

1000を超えそうな勢いの軍勢と互角に戦っている。

「いぬぬん☆スラッシュ！！」

いぬぬんの空を裂く斬撃が鳥たちを襲う。

鳥は戦闘不能になり、地へ落下していく。

「ハハハハハハハハ、血が騒ぐわ、
消滅する戦意<イレイザー・アグレッシブ>」

いぬぬんの放った大魔法は全鳥たちを地に落とした。

「私は士気が高まってくると大魔法が使えるぬん。
覚えておくといいぬん。」

「知らないから。」

しかし、1羽だけ、残っていた。

それは昨日会ったからちゅんであった。

「やはり貴様であったか、からちゅん。
私にことを立てるとは一体どういうことか??」

「ごめんね。みんなを止められなくて。
でも、カラザーク星の未来が本当に心配なんだよ。
生ゴミばかり送られて来て、とても臭いんだよ。
それに、犬鳥10か条の7条違反だと思うんだ。
今朝の朝食がなかったことは。だから、決闘だよ、いぬぬん！
甲乙ははっきりつけようじゃないか！！」

「はっ！ 望むところぬん！！
いぬぬんは貴様なんぞに絶対に負けないぬん。
いざっ！！」

いぬぬんは一気に加速。からちゅんとの距離を詰める。

そして、クレイモアを振り下ろした。

しかし――

ザシュッ！！

からちゆんの影は虚空に消滅した。

いぬぬんの顔がゆがむ。

「くっ……幻影であったか……

しかし、ものすごい痺気だ。体が重くなる。」

からちゆんは口をゆがめて笑う。

「からちゅっちゅっちゅ、ボクのダークオーラに触れて、
穢れない奴はいないさ。烏銃・ザークアルガナ！！」

「烏銃・ザークアルガナ！？」

いぬぬんの表情がひきつる。それほどのダメージなのか！？

「烏刺突創烈！！」

「くっ……剣気・絶断衝っ！！」

いぬぬんは剣気で銃撃を防いだ。

からちゆんはどうやら目を狙っているらしい。

ひどいやつだった。

シュンッ――

からちゆんが消えた。

そして――

「ふんっ！！」

「がはっ……！！」

いぬぬんのみぞおちにからちゆんのボディーブローが炸裂した。

瘴気でいぬぬんの体が黒くなる。

「くっ……いぬぬん☆スラッシュ！！」

「甘い、烏大爆撃！！」

「きゃああああああああっ！！！！！！！！」

弱っているいぬぬんにからちゆんの猛攻が押し寄せる。

いぬぬんはからちゆんの瘴気ででろでろになってしまった。

「ふふふふ、魔力がたまって来たよ。

暗黒の闇<デス・ダークネス>」

「ぐっ……これは、弱った相手の魔力を奪う魔法……一体何を……??」

「止めを刺すのさ。真・烏刺突創烈！！！！！！！！」

いぬぬんの体は吹き飛び、地に落ちた。

………

……………

……………

「いぬぬん……！！！！」

「あっ、和也様、残念です。負けてしまいました。」

「ふっ、犬羅神といえどこうなってしまっはかたなしだな。

ボクがああ世へ送ってあげるよ。」

「てめえ！ いぬぬんのこと好きじゃなかったのかよ！！」

「あ？ ボクの星の烏たちを斬りつけておいてよく言うわ。

こんな弱いやつはボクは知らないね。こんな三下、早く死んだ方がいい。」

「てめえ、よくも……」

「か…… ずや様…… 私は…… もう、ダメです……。
最後に口がなめたいです…… こんなところで終わってしまうなんて、
残念です……。」

「いぬぬん……………！！！！！！！！」

俺は無意識のうちにいぬぬんにキスしていた。

……

……………

……………

ズビシャアアアアン！！！！

いぬぬんの心に和也の聖書の御言葉が流れ込んできた。

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。
たじろぐな、わたしはあなたの神。
勢いを与えてあなたを助け
わたしの救いの右の手であなたを支える。
イザヤ書 41 章 10 節

イエス様、私は…… 信じます！！

ピカアアアアアン！！

いぬぬん・クレイモアがすさまじい閃光を放った。

ダーク・オーラの影響はもはや微塵もなかった。

「主に望みをおく人は新たな力を得
鷲のように翼を張って上る。
走っても弱ることなく、歩いても疲れない！！
イザヤ書 40 章 31 節

いぬぬん☆スラッシュ！！」

「がはっ……幻影に騙されない……そんな馬鹿な……」

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

ヘブライ人への手紙 11章 01節

いぬぬん☆ラッシュ！！」

「くっ……鳥大爆撃！！」

「無駄ぬん。士気が高まって来たよ☆

いぬぬん☆スプラッシュ！！！！！！！！」

「はうっ！！ 体に力が入らない……これは一体……。」

からちゆんはダウンしてしまった。そこへ――

いぬぬんが剣に気を送り込む。そして――

「これで、最後ぬん。いぬぬん☆アルマゲドン！！！！！！！！」

すさまじい光の奔流がからちゆんを襲った。

「ひゃあああああああああっ！！！！！！！！

ごめんなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！！！！！！！！」

いぬぬんはからちゆんの悪しき心を粉々に打ち砕いた。

いぬぬんは地面へと落下した。

……

……

……

「いぬぬん……！！！！！！」

いぬぬんのもとへ近寄ってみる。

「勝ちましたよ、和也様、愛の力です。」

「まさか、逆転するとは、信仰の勝利だな。」

「もう一回！　もう一回だけキスを！！」

「だめだ。そんなにするもんじゃない。」

「ケチ……………」

「さすがいぬぬん様、1000の鳥をしとめるとは流石です！！」

「あなたたちは一人で千人を追い払える。
あなたたちの神、主が約束されたとおり
御自らあなたたちのために戦ってくださるからである。
ヨシュア記 23章 10節
と書いてあるとおりぬん。信仰の勝利ぬん。」

「いやー、よかった、よかった。」

「もっとからちゅんたちへの処遇を考えた方がいいチュピね。
これではまた暴動が……………」

と、そこへ……………」

ドゴオオオン！！！！

「きゃあっ！！」

町にレーザーが降り注ぐ。いったいこれはなんなのか。

「ちゅっちゅっちゅっちゅ、私は全能の覇者、すずめっちゅなり！！
この星はもはや、我々のもの。総員、かかれ！！」

「はいっちゅ！！」

「チュピ——！　また敵が！！　どうしましょう？　いぬぬん様？」

「もちろん迎え撃つ。信仰の力、見せてくれる！！」

「スズメ・デスレーザー！！」

「和也様！ 逃げてください！」

いぬぬんは俺の腕をつかみ空へ瞬時移動した。

しかし――

町は焦土と化し、あちこちで炎が上がっていた。

「ちゅっちゅっちゅ。パーティーはこれからですよ。」

いぬぬんは冷汗をかいていた。

.....

.....

.....

はっ！！ んっ?? ここは.....

ベッド.....俺の部屋.....ってことは.....

今のは全部夢??

ん――――よかったようなよくないような.....

しかし――

★エピローグ ～永遠の絆～★

「和也様、ふつつかものですが、どうかよろしく願いいたします。」

「えっ？ 何でいぬぬんがここに??」

「あなたの夢に感動しました。チュピータ星からこちらへ引っ越してまいりました。
なにとぞ、よろしく願いします。」

「いや、もう充分だから！！」

俺の苦勞は絶えなかった。

——END

あとがき

……………前の方が面白いよなあ。後半似ちゃったし、
いぬぬんが和也に惹かれるその動機、根拠、過程が曖昧で
キャラが立てにくかった。

お読みくださってありがとうございます。

次回作がもしできれば、もうちょっとまともな作品で、
読んで下さったらこれほどうれしいことはありません！！

それでは、本当に、ありがとうございました！！

おしまいです。

END

参考文献 新共同訳聖書

星間戦争 ～鳥VS犬～

著 ラビス*

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
